

ボーフムのレッシング・シューレ訪問記録

船尾日出志

Unterricht in der Lessing-Schule Bochum

Hideshi Funao

1. はじめに

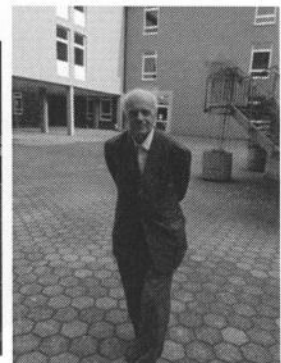
2014年9月8日と9日、ドイツ連邦共和国ノルトライン・ウェストファーレン州の工業都市ボーフムの市立ギムナジウム、レッシング・シューレを訪問し、教科「教育科学」の授業を参観した。同校の校長先生と連絡をとり、そのような機会を用意してくださったのはユルゲン・シェーファー（Jürgen Schäfer）先生である。シェーファー先生は同校の元教諭で、筆者とは20年以上前からの知り合いである。



（レッシングは18世紀の劇作家）



（正門、生徒数は1000名）

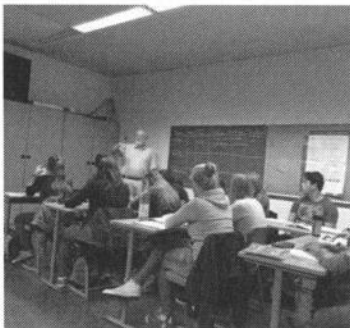


（シェーファー先生）

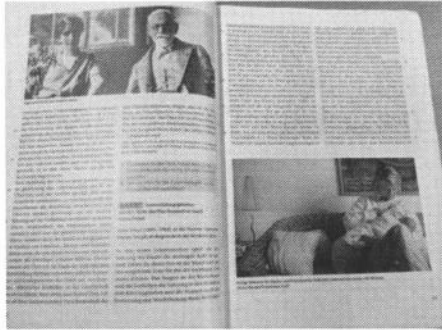
レッシング・シューレは1890年の創立であるので、すでに124年の歴史を有している。第1次世界大戦の終戦時点では、1914年から1917年までの94名の新入生のうち11名が戦争のために亡くなったという記録があり、第2次世界大戦中の1945年3月18日には空襲のために校舎と体育館が破壊しつくされ、同年5月8日の終戦時点では、1933年から1944年までの149名の卒業生のうち33名が戦争のため死ぬか、行方不明になったという記録がある。そしてレッシング・シューレという名称を持つようになったのは1948年のことである。ナチス時代には「ヒンデンプルク・シューレ」という名称を強いられていたことからすれば、レッシングという名称は民主化と結びついていることは容易に想像できる。

2. 9月8日第1時限

第1時限の開始は7時45分、参観したのはベテランのシュレーダー先生の「教育科学」の授業であった。シュレーダー先生とシェーファー先生は長く同僚として働いていたことがあるとのこと。



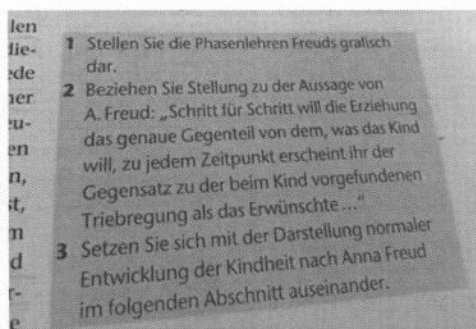
わたしは、自己紹介の後、シュレーダー先生に「日本で紹介したいので撮影していいか」と尋ねた。シュレーダー先生は自身では答えず、生徒たちに答えるように指示した。生徒たちはわたしの方を見て、許可を与えてくれた。なお生徒たちの年齢は全員17歳であった。テキストも貸していただいたが、アビツアー用の副読本をテキストにしているとの説明があった。



この時限のテーマは精神分析、特にフロイトが中心にあった。わたしはテキストを見たときに、超自我について書かれた箇所に注目した。

「自我の行動は次の場合に正しい。すなわち、それがエスと超自我と現実の諸要求を満足させる場合に、それゆえエスと超自我と現実を互いに和解させることを知っている場合に。自我と超自我の間にある関係の詳細は、一貫して子どもの両親との関係に立ち戻ることによって理解される。」

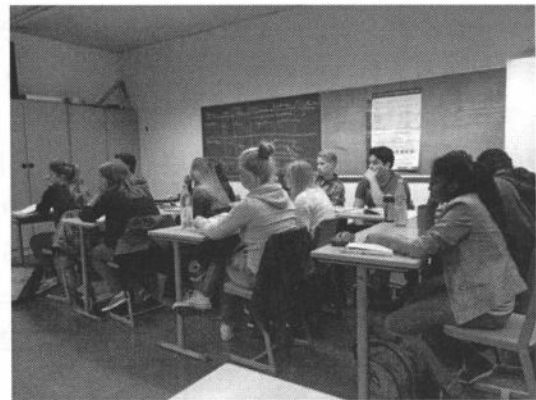
このような意義深い文章を読むことができるテキストが使用されていることに感銘を受けた。



この時限において生徒たちが主に取り組んだのは左のテキストに書かれた3つの課題のうちの第2の課題であった。すなわち、

アンナ・フロイトの次の命題について自分の考えを述べよう。「少しずつ教育は、子どもが欲するものとまったく反対のことを欲するようになる。どの時期においても、教育には子どもにおいてあらかじめ見出されている衝動と反対のものが願わ

しいと思える…」



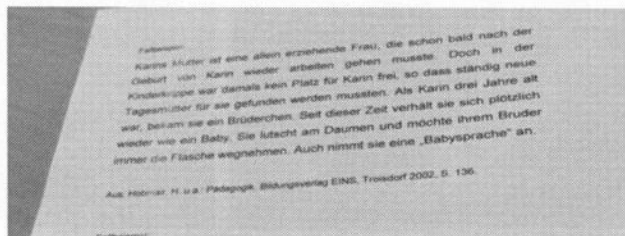
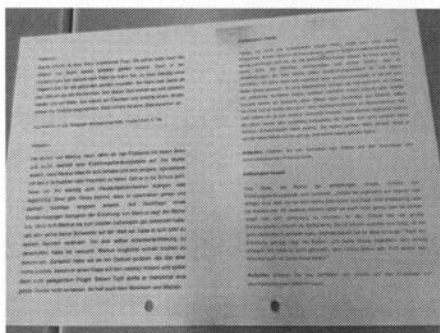
上の2枚の写真からも分かるように、授業は実に落ち着いた雰囲気の中で行われた。生徒たちは次々と意見を述べていた。シュレーダー先生は司会役に徹していた。

わたしは、アンナ・フロイト自身が「子どもの欲することと反対のことを欲する教育」そのものを肯定的にみているのか、否定的にみているのかについて、生徒がどのように判断するのかに興味があった。わたしが聴いた範囲では、レッシング・シュレーの生徒たちの解釈は、予想される日本の学生の解釈とはずいぶん違っているように思えた（帰国後、愛教大の学生たちのなかで調べた結果は、わたしの予想が正しかったことを証明している）。

3. 9月8日第2時限

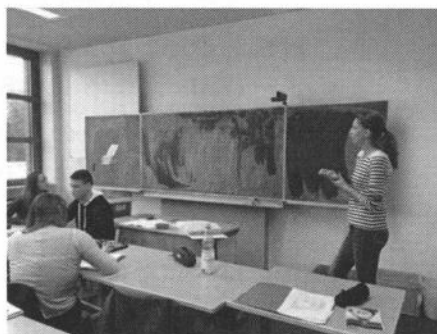
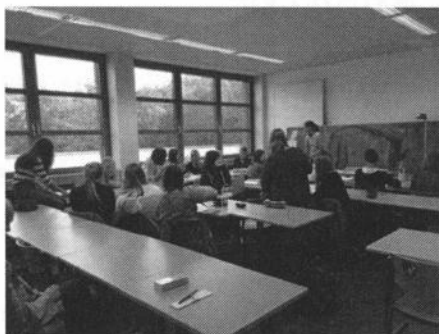
第2時限の開始は8時45分、担当はカイル先生、生徒の年齢は同じく17歳で、生徒数も同じ25名であった。やはり精神分析が主題であったが、カイル先生は手作りの資料をも

とに授業を進めた。配布されたプリントには4つのテキスト(事例)が掲載されていたが、この時限では最初の事例に関して先生と生徒たちの対話が行われていた。

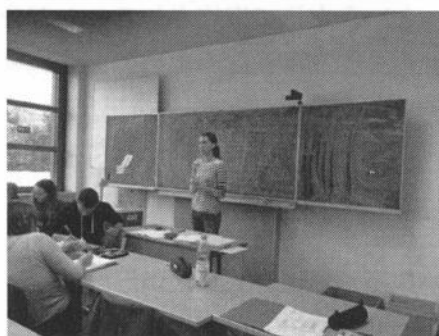


上のテキストの内容は次の通りである。

「カリンの母親は一人で子育てせざるをえない女性である。かの女はすでにカリンの誕生直後から再び働きに出なければならなかった。とはいえ当時、保育所は定員が埋まっており、カリンのために余地はなかった。したがって常にカリンのために新たな保育ママを探さないといけなかった。カリンが3歳のとき、弟ができた。そのとき以来、突如かの女は再び赤ちゃんのようになった。かの女は親指をしゃぶり、そして弟から哺乳瓶を奪おうとした。さらに『赤ちゃん語』で話した。」



カイル先生は最初、一斉授業風に指導を行っていたが、生徒たちの様子を見て、グループ活動



に切り替えられた。10分弱のグループ内での話し合い後は、より活発な意見が生徒たちから表明され、数分ほどの間で黒板は板書で埋めつくされた。

赤ちゃん返りをしてしまったカリンのフラストレーションを緩和するための手立てが提案されたが、「赤ちゃん返り」自体は必ずしも否定的な事象でなく、望ましいことでさえあるという意見もあった。授業後、わたしは「皆が真面目に学び、そして能動的に発言している様子に感銘を受けました。ありがとうございました」と述べた。

4. 9月9日授業参観前

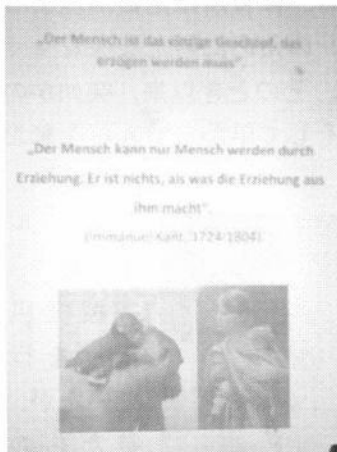
9月9日は第3時限(9時45分開始)と第4時限(10時45分開始)の参観予定であった。学校に到着したのは8時30分頃であった。中庭をみると、10名弱の生徒たちが仲良く遊んでいた。わたしは思わず、声をかけた。「日本から来ました。日本でみなさんが仲良く遊んでいるのを紹介するために、写真を撮っていいですか」。すると生徒たちは一列に並び、礼儀正しく対応してくれた。しかし実は、かれらは遊んでいたのではなく、授業の一環



お願いした。上の写真はその際の様子である。

としてコミュニケーションの樹立のための遊びをしていたのである。そのことに気づいたわたしは、謝罪するとともに、続けて活動するように

5. 9月9日第3-4時限

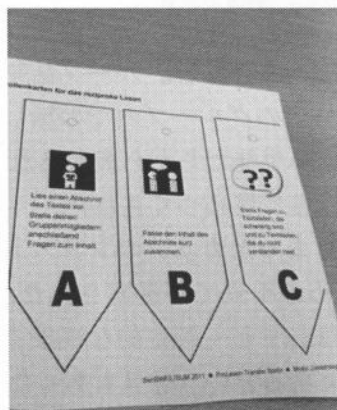


参観したのはやはり「教育科学」の授業であった。ただし生徒たちは1学年下(年齢は16歳)。担当教員はミュージアム先生、そして助言者としてシュレーダー先生が同席していた。しかしシュレーダー先生は一切干渉なさらず、授業はミュージアム先生によって進められていた。

教室の教壇の背後(生徒から見て左上)には、左のようなOHPスライドが掲示されていた。書かれているのはイマヌエル・カントの言葉である。

「人間は教育されなければならない唯一の被造物である。人間は教育によってはじめて人間になることができる。人間は、教育が人間から作り出したものに他ならない。」

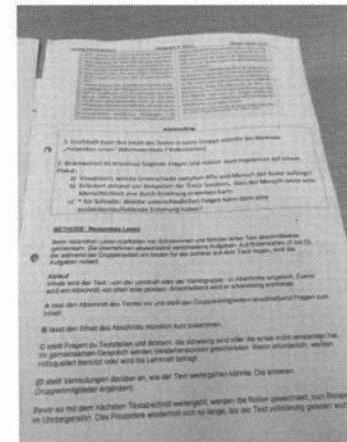
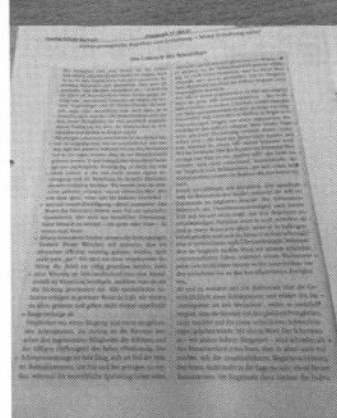
シュレーダー先生から事前にいただいた資料から、この授業が「相互的文章音読」という方法で実施されることが分かっていった。左の写真は「相互的文章音読のための役割」を規定したものである。



「A=テキストの1節を朗読しよう。続いてあなたのグループメンバーに内容に関する質問をしましょう。」

B=その節の内容を簡潔にまとめましょう。

C=テキストの難しい箇所、およびあなたが理解していない箇所について質問をしましょう。」



この授業のテキストは左のようなプリント資料として配布された「教育の人間学的アスペクト」であり、著者はフェルナント・サファターである。

サファターのテキストに続いて、「相互的文章音読」の方法に

ついでの説明と授業の流れが書かれている。

方法：相互的朗読においては4人の生徒がテキストを1節ずつ一緒にしっかり学んでいく。4人は交替でさまざまな課題を引き受ける。役割カード（AからD）には、それらのカードはグループ活動の間、皆が見えるように机の上においておくのがベストだが、課題が明記されている。

流れ：あらかじめテキストは一教員ないしグループによっていくつかの節に分けられる。最初に一節が全員によって黙読される。続いて分業的に学ばれる。

（A, B, Cについては省略：上を参照のこと）

（Dはこのテキストがどのように進んでいくことが可能か予想しよう。グループの他のメンバーが補足する。）

次のテキストの節に進む前に、役割が交替される。たとえば時計回りに。その過程は、テキストが完全に読み終わるまで反復される。

翻訳：サファターのテキスト

教育の人間学的アスペクト — 教育は必須？

人間を教育する期間

わたしたち人間は、なるほどすでに誕生時点で人間的である。しかしようやくその後、わたしたちは完全にそうなる。たとえ、わたしたちがその「人間的」という概念にいかなる道徳的意義も与えず、そして残忍なマクベス夫人もまた人間的であり—かの女には人間愛のミルは縁遠いか、より適切に言うなら、反感をもたらすものであり—、そして暴君、人殺し、強姦そして児童虐待が人間的であり、それどころかきわめて人間的であるということを受け入れるとしても、その場合もまた次のことは相当に真実である。すなわち、完全な人間性は何か生物的なものではなく、アザミをアザミにし、そしてタコをタコにするもののように遺伝的にプログラムされた固定的なものではないということ。

そのほかの生き物はすでに誕生時に、最終的なもの、何が起ころうと関係なく、変わりえないものである。他方わたしたちは人間についてせいぜい、人間性に向けて生まれてきた、とすることができるだけである。わたしたちの生物学的人間存在は、およそ第2の誕生のような追加的な確認を必要としている。その第2の誕生のなかで、わたしたち自身の努力と他の人々との関係によって第1の誕生が最終的に確認される。わたしたちは確かに人間として誕生するが、わたしたちの人間性をようやく次の場合に完全に獲得する。すなわち、他の人々がわたしたちに意図的に—わたしたちの合意をえて—それを「伝染させる」場合に。人間の本質は一部は自然発生的なものから成っているが、しかし技術的な熟慮もまた必要とする。完全に人間になることは—良き人間であろうが、悪い人間であろうが一常に技術である。

その特別な過程を人類学者はネオテニーと名付けている。ネオテニーという言葉は、わたしたち人間は早生まれであるということ、まだまったく「完全」でないのに誕生するということを意味している。わたしたちは、完全に食べられるには、包装紙から取り出された後、なお電子レンジのなかでの10分間を、あるいは沸いたお湯のなかでの15分を必要とする調理前の食べ物のようなものである。あらゆる人間の誕生は確かにあまりにも早く行われる。わたしたちはあまりにも小さく生まれ、そしてとても立派な哺乳動物の子どもとは言えない。

乳児と生まれたばかりのチンパンジーを比較しよう。最初に、サル初期の諸能力と赤ん坊の無力さのコントラストが目につく。チンパンジーの子どもはすぐに、母親の毛皮にしがみついていることができる。それによりあちこちに運んでもらえる。それにたいして人間の子どもは、腕に抱いてもらえるように、好んで泣き、あるいは笑う。人間の子どもは、まったくもって他者の注意に依存している。その成長の経過のなかで、小さな類人猿は急速にますます器用になり、そしてそれに比べて人の子はきわめて緩慢にしかその無力さを克服しない。

猿は、可能な限りはやく自力で良き猿としてやっていけるように一すなわち、はやくおとなになるようにプログラムされている。赤ん坊はそれにたいして本来的に、可能な限り長く子どもで、そして頼りないままのように事前に定められている。赤ん坊が、生きる上で重要な諸事物において、より長く他者との有機的結合に依存していればいるほど、それだけより良い。それどころかその身体の様子は違いをいっそう強める。—赤ん坊の皮膚は毛がなく、そしてピンク色のままである。他方、小さな猿はいつも毛で覆われている。デズモンド・モリスの有名な本のタイトルが言うように、赤ん坊は「裸の猿」であり、すなわち未成熟な、まだおとなになっていない類人猿であり、毛むくじらのチンパンジーに比べて、子どもの段階に留まる。

とはいえ次第に、しかし絶え間なく子どもの資質能力は増大化する。それにたいして猿は追加的学習において停滞し始める。チンパンジーは短時間で生き伸びるのに最も必要なことを我が物とし、そしてそのレパトリーを揃えるのに長い時間を必要としない。もちろんチンパンジーもまた引き続き、ときには新しいことを（何よりも檻に入れられ、そして人間が教えるとき）学ぶが、しかしとりわけ無尽蔵に思える素質を有する人間の子どもと比べれば、さらに驚かせるようなことはほとんど示さない。人間の子どもは、その成長期を通じて自己の器用さを、きわめて簡単な習熟から非常に複雑な習熟に至るまで、ますます高め続ける。

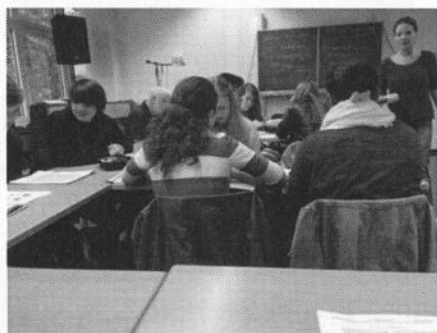
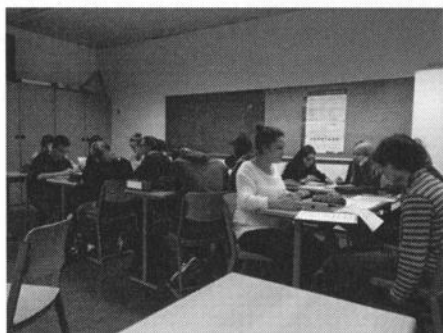
ときに熱心なファンがチンパンジーの器用さに驚き、そしてチンパンジーが「人間よりいっそう知的である」と説明する。その際、その熱心なファンはもちろん、同じ程度の習熟を有する人間は尊重されず、そして改善不可能な無能者であると考えられることを失念している。一言でいえば、チンパンジーは一他の高等哺乳類のように一人間の子どもよりもいっそうはやく成長する。しかしまたチンパンジーは、もはや何か新しいことを追加的に学ぶことができないという不可逆的な随伴現象とともに、はるかに急速に老化する。それに対して、わたしたちの種の構成員は、なるほどその死の日まで未熟で、探り続け、そして誤りを犯しうるが、しかしある意味、ずっと若く、つまり新しい知識にたいしてオープンであり続ける。ロバート・ルイ・スティーブンスンは、かれに若くして死にたくなければ、健康に注意しなさいと助言してくれた医者に次のように反論した。「ああ、先生ね、すべての人間は若くして死ぬのですよ」。それは深く、かつ詩的な真理である。

それゆえネオテニーは「若者の可塑性あるいは感受性」（教育者は教育可能性について語る）を意味するが、しかし他の人間存在との必要な関係もまた包括している。子どもは2つの妊娠状態を生き抜く。第1に母胎において生物学的法則に則って、第2に、そのなかで子どもが成長する社会的な母親の懐のなかで。第2の場合に、子どもはさまざまな定まったシンボル—その最たるものである言語—に、そしてその文化の儀式的・技術的風習に従うようになる。人間的である可能性は、他者、すなわち、子どもが直ちにあらゆる手段で模倣しようとする仲間である人間の助けを得ることによってしか実現できない。

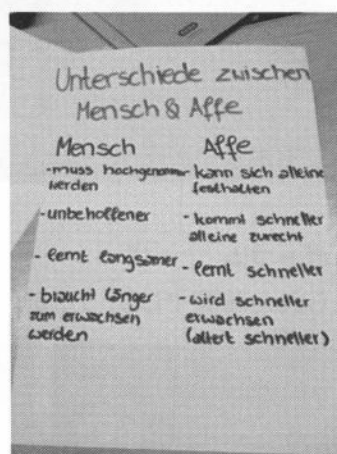
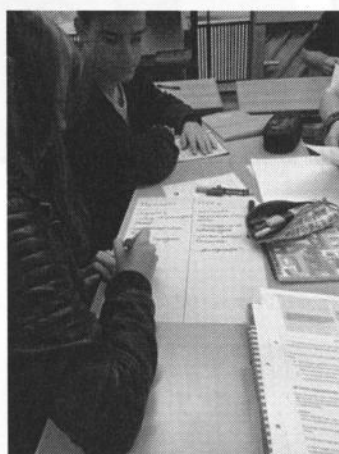
この模倣衝動、つまり同じ種の仲間を真似たいという意志は類人猿でもみられる。しかし人間という名の猿の場合には、その意志は何倍も強い。わたしたちは何より猿まねをするが、模倣の助けを得て、わたしたちは猿を超越した何ものかになる。人間社会の特徴は、その構成員が多かれ少なかれ偶然かつ不意に

ではなく、かえって意識的かつ公然と認識できるように若者たちの模範になるということである。

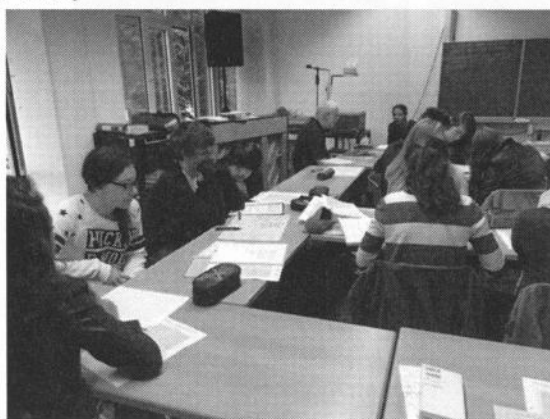
(フェルナント・サファター『だから教育を。何をわたしたちは、子どもたちに与えることができるのか』、キャンパス出版社、フランクフルト/ニューヨーク、1989年、24頁以降)



当然、3名ないし4名のグループ単位で授業が進む。ミュージアム先生は机間指導し、シュレーダー先生は座ったままである。

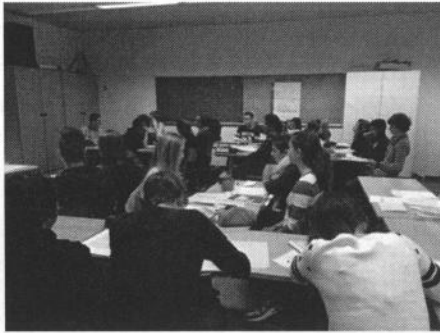
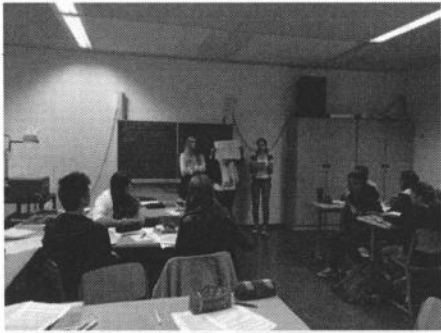


生徒たちは教科書『教育の状況と教育の過程』を持参してきてはいるが、この日はいっさい使用しなかった。テキストを読み終わってから、グループごとにノートを作成し始めた。「人間と猿の違い」を整理しているグループが多いようであった。そして第3時限が終了した。

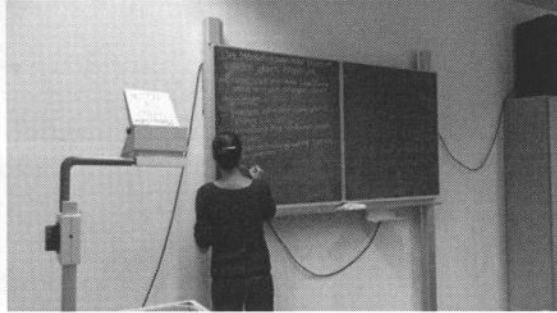


しかし休憩時間にもグループの学びが続いていた。その様子を横目に、ミュージアム先生とシュレーダー先生が相談している。

そして第4時限にはグループのプレゼンテーションが行われた。この日は2つのグループが発表した。人間と猿の違いを中心においた発表であった。

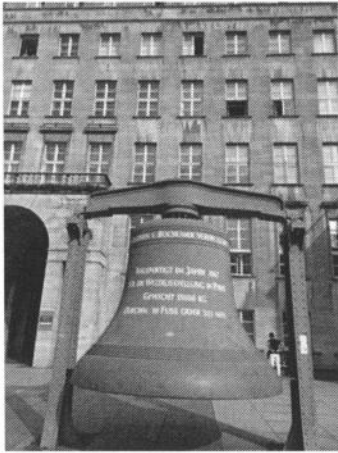


2 つ目のグループのプレゼン終了後、今度は全体での意見表明が行われた。ミュージアム先生が発表された意見を板書。



6. ボーフム

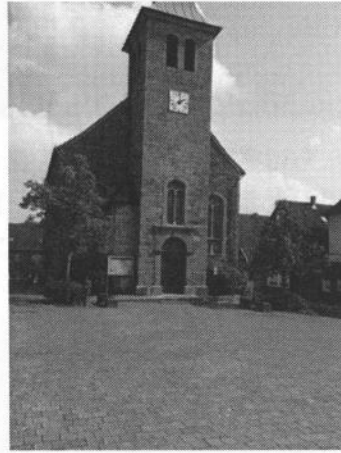
限られた時間ではあったが、シェーファー先生にボーフムを案内していただいた。



(ラートハウス前の大きな鐘
1867年のパリ国際博覧会で展
示された。重さは15トン)



(ボーフムのルール大学)



(↑ブランケンシュタイン城跡の教会。↓下の2枚はそこから
のルール渓谷の眺め)

